日本財団 補助
The Nippon Foundation

No. 18

The Tokyo Foundation
ISSUES SERIES

日本の外交安全保障戦略を考える

神谷 万丈
（防衛大学校助教授）

東京財団

まえがき

この議事録は、本財団がシンクタンク事業の一環として実施している「研究セミナー」の第9回会合「日本の外交安全保障戦略を考える」の速記録である。

今回の会合では、講師としてお招きした**防衛大学校 神谷万丈助教授**より、上記のテーマについての報告が行われ、その後、報告内容に基づき活発な議論が行われた。

本セミナーは、専門的なテーマについて、専門性のある講師と参加者が密度の高い議論を行うことを目的として開催するものである。なお、本セミナーは日本財団の補助を受けて実施している。

この議事録は、本セミナーの成果を関係各位に報告するとともに、より多くの方々にもその内容を共有していただけるよう作成されたものである。

1999年7月

神谷（かみや） 万丈（またけ） 氏　略歴

(Matake Kamiya)

1961 年生まれ。

東京大学教養学部卒業後、コロンビア大学大学院、防衛大学校助手、同講師を経て 1996 年より現職。

この間ニュージーランド戦略研究所特別招聘研究員を務める。

専攻は、国際政治学、安全保障論、国家戦略論。

主な著書に『戦略序説』等。

目　次

第１部　発言内容

1.　報告要約 …… 1

2.　講師報告 …… 3

3.　質疑応答 …… 21

第２部　巻末資料 …… 43

1. 報告要約 (Summary)

「日本の外交安全保障戦略を考える」

日本は軍事的自立のオプションをあえて放棄し、日米同盟を基軸にして「軍事中級政治大国」の道を選択すべきである。同時に国際社会に対し、日本は自国の利益だけでなく、世界とアジアの秩序にも配慮して軍事的に自己抑制するのだということとことを明確にし、さらに、その選択が十分にアプリシエートされず、軍事的に自立しないことを理由に日本が大国として遇されないならば、日本人としても不本意ながら「普通の大国」を目指さざるを得なくなるかもしれないというメッセージを発信することが必要である。それによって初めて、軍事大国にならずに政治大国になるという日本人の希望が実現する可能性が出てくる。また、軍事面では中級の「普通でない大国」として生きるという日本の選択を他国に認知させて初めて、日本の国際貢献は非軍事面を中心にするというグローバル・シビリアン・パワー論的な構想が単なる日本のひとりよがりではなくなるのではないか。

"Considering Japan's Future Diplomatic and Security Strategy"

In selecting its future path, Japan should be daring enough to abandon militarily autonomy in favor of being a "political superpower" which, on the axis of the US-Japan alliance, maintains only a second-class military force. Japan should make its position clear that, within international society, it seeks not only its own self-interest; but, through military self-restraint, it seeks also to maintain order in Asia and the world. If, however, this choice is not fully appreciated or if Japan is not be treated as a superpower because of its decision to divest itself of military autonomy, it may, though reluctantly, be necessary for Japan to send out a message that it has no choice but to aim at becoming a "typical" superpower. If this can be avoided, however, it will for the first time be possible for the Japanese people to realize their aspiration of Japan being a political superpower, not a military one. In other words, it will be by other countries recognizing Japan as being a militarily

second-class —that is, "atypical,"— superpower that Japan will be able to make non-militaristic international contributions as a "global civilian power." In so doing, this concept of international contribution will no longer be a mere excuse for self-complacency on Japan's part, but will become a viable concept —one capable of gaining the support of other nations as well.

2. 講師報告

神谷　今、ご紹介にありましたように、この題は、何とでもなるように、だいぶ前に作戦として付けたものであります。本日は、ストレートに日本は、こうしろ、ああしろとか、そういう話を細かく具体的にするよりは、もうちょっと大風呂敷の話をしたい。自分でも結論が出ていないような話を図々しくやって、皆様のご意見を承って、それを活用しようという甚だずるい考えでやってまいった次第であります。そもそも出席者の予定リストをいただいて、こういう方々の前で、私が日本の外交安全保障戦略を図々しく勝手に考えるというのも、いささか気がひけなくはないんですが、せっかくいただいた機会ですので、図々しくやりたいと思います。

まず、型通り、日本が現在、直面している外交安全保障政策上の課題を考えると、普通、北朝鮮問題が最初に大きくクローズアップされてきて、その次、最近だったら日露関係をどうやって普通の方向に持っていくかというのも出てくるかもしれないと思います。しかし私は、これらは重要ではあっても、これから日本で根本的な重要性を持つ課題ではないように思っております。と言って、済ませるとあまりですから、北朝鮮問題と日露関係について、今後、日本がどうすべきかということについて、これから先の本論とちょっと関係のないような気もしますが、私なりの考えだけ、いい機会ですので宣伝させていただきます。

北朝鮮については、本日も来てくださっています、フォーサイトの横手さんのご尽力で１本書かせていただきました。日本の対北朝鮮戦略はいかにあるべきかということに関する私の基本的な考え方は、そこで述べました。『フォーサイト』の５月号です。ご興味のおありの方は、図書館、資料室等でお探しいただければ出ております。

私は、北朝鮮は変ちくりんな国でとんでもない国だとは思っておりますけれども、詳細を省いて結論だけ言いますと、過去 50 年、自殺行為をしたことはない。過去の北朝鮮の行動歴から見てそのことははっきりしているのではないかと思います。力には非常に敏感に反応して、ある意味で非常に注意深く計算して、やっている。彼らなりの合理性の基準から見て何か得をしそうなことだと、われわれの常識から見て変ちくりんなことでもやりますが、全く成算が立たないことをやるクレイジーな国だというのは、多分、間違いだろうと考えております。だとしますと、まず一方で抑止というものは北朝鮮のような国に対しては非常にうまく効くのではないか。これが基本になるんじゃないかと

いうことが1点であります。

北朝鮮問題は、核ミサイルがこれからもしかしたらそこに存在するようになるんじゃないか。そこまでいかなくても、すぐにミサイルが飛んでくるかもしれないとか、甚だ日本人にとっては気持ちのよくない展開を見せていますけれども、しょせんは、あの国はあまり強い国ではありませんから大騒ぎする必要はなくて、しっかり抑止をしておけば基本的には問題は解決するはずであって、それはそんなに大変なことではなかろう。もちろん、そこでは日本自身の（防衛面での）準備と日米韓の防衛協力は重要である。

それでは、北朝鮮との関係改善をどう考えるかということです。これは端的に言って、北朝鮮は日本と関係を改善するといいことがいっぱいありますが、日本は北朝鮮と無理に関係を改善しなくともそれほど困ったことは起こらない。それから、関係を改善したからと言って、例えば北が核開発をやめてくれるかとか、ミサイルをやめてくれるかというとそんな保障もない。多分やめないだろう。そういうことをいろいろ考えますと、北次第だという姿勢でいくのがよかろう。

一方で、北朝鮮を干ぼしにするという一部の威勢のいい政治家の方々のような、ああいう態度は無茶だと思います。というのは、日本は自分の国が安全である限りはよその国と共存することにはやぶさかでないはずなので、別に干ぼしにしなくたって悪いことさえしないでいてくれればいいはずである。しかも、北朝鮮の体制がどうのこうのという話は、韓国人と北朝鮮人が決めることであって外人である私たちが口を出すことではなかろう。ですから北朝鮮を干ぼしにすべしという主張は間違いだと思います。

その一方で、何としても関係を改善しなきゃいけないというので、こちら側から次々に甘い餌を投げて、向こうを引き寄せようとする。これも今までうまくいった例のないやり方ですし、よろしくなかろう。結論は、中間にあって、（日本としては）いつでも対話に応じるし協力もするけれど、それはあなたが何か誠意を示してくれたときですよという姿勢を明確にしていくことではないかと思っています。

これは、国際政治の理論で言う、ティット・フォー・タット(TIT FOR TAT)とか、「目には目を」戦略というのに似ているんじゃないかと思いまして、フォーサイトの論文ではあえて端的にそれがいいのではないかと書きました。実際には、微妙にズレがあるかもしれませんが。目には目を戦略というのは、相手が善意、協力でくればこっちも協力する。相手が協力でこないなら、こっちも協力しないという原則でいくという話であり

ます。これが恐らくは、相手に協力の得を悟らせる学習効果が一番期待できていいのではないかと考えています。

ただし、日本の対北朝鮮戦略で肝心なことは、TIT FOR TAT と同時に、抑止を一方でやっておくということです。そういうふうにしておけば北朝鮮が核を持つようなことになったとしてもあわてることはない。私は、核兵器だって（北朝鮮が）その気になって開発を続けたらやがて持つと思っておくべきものだと思っています。というのは、核不拡散の歴史は、あるいは核に限らない、あらゆる不拡散の歴史は、不拡散体制は、拡散を遅らせることはできても止められないということを教えているからです。ですからやがて、北朝鮮も核兵器を持ってしまうかもしれない。しかし、その時日本は慌てふためく必要はないということだろうと思います。

日露関係も似ています。日露関係の改善ですごく得をするのはロシアであって、日本としてはこれが非常に険悪になるとよくないでしょうけれども、現状よりよくなったから何かすぐに大きな得があるかというと、そういうことはないわけであります。領土問題等で一定の筋を通して、後は向こうの出方待ちということで、妙に擦り寄ることをしないほうがよかろうと思っております。特に、橋本提案みたいなわりと劇的なものをこっち側から出しているにもかかわらず相手側が一向にそれに応じてこないようなときに、無理にどうこうしなくとも淡々とやっていればいいのではないかと思います。

日本にとってこれらの問題が重要でないとは申しませんが、日露関係についてはロシアはやっぱりヨーロピアン・パワーですし、現在、アジア・太平洋、日本周辺でのプレゼンスが非常に低くなっていることもあります。

北朝鮮は、恐らく問題としては長期的な問題ではなくて、今後、あの国が何年もつかわかりませんが、30 年後、20 年後を考えたときには何らかの形で今とは違うものがそこに存在する可能性が大きい。もしかするとそれは 10 年先かもしれない。誰も予想はできませんが、30 年先どうかというと、今と同じような北朝鮮はないという方に賭けておいたほうが多分儲かる確率は高いだろうと思います。

ですから、これらはこれからの日本の外交安全保障戦略を構想する上での根本課題ではない。より重要なのは、当然のようですけれども日米関係、日米中関係、それから、日本が世界でいかに敬意を払われる国になって、ナイ教授の言うところの「コ・オプティブ・パワー(co-optive power)」を高めていくかということだろうと思います。

日米関係においては、日米同盟の再定義は一段落したわけですけれども、今後アメリカとの協力関係を保ちながら、日本が独自の利益とか立場を主張していくことが課題になっていくだろうと思います。つまりアメリカと協力しつつ、いかに自立性を高めていくか。あるいは取り戻していくかというべきかもしれません。こういうのが、多分課題になるだろうと思います。

それから、日米中関係、本当は日中関係と言いたいところですけれども、日中関係はどうも単独では存在していないような気がしますので、米を入れて日米中関係と言うことにします。ここでも日本の自立性の回復が大きな課題になるように思います。日米中関係におきましては、「普通でない大国」としての日本が非常な困難に直面しているのが現状であろうと思います。アメリカ、中国は、極めて伝統的な大国の行動様式、あるいはものの考え方を持っている国ですが、軍事面では大国になれるけどならない。あるいは政治面でも、伝統的な大国の国際政治のやり方をやらないということで歩んでいる日本が、いかにこれらの国と対等に今後やっていくか。これは、非常に難しい課題だと思います。そのための鍵は、やはり日本が何らかの形で ―アメリカとの協力をやめてしまうというのではなくて― 自立性を取り戻すということではないかと思います。

それから、（日本が）アジア太平洋や世界で敬意を獲得してコ・オプティブ・パワーを高めるという話ですが、このコ・オプティブ・パワーはジョセフ・ナイの言葉で、一般にはむしろソフトパワーという言葉で知られているかもしれません。これは翻訳が難しくて、確か昔、高坂正堯先生の本では「互選的な力」と訳されていましたが、これでは学生に書いて見せても「何ですか、それ」と言われるのが落ちであります。訳しようがない。

ではコ・オプティブ・パワー（ソフトパワー）とはどういう意味かと言うと、軍事力や経済力で相手に言うことを聞かせる、自分の望みの行動を取らせる。あるいは、自分の好まない行動を取らせないというより、もっと微妙に知らず知らずのうちに、よその国が自分好みの行動を取り自分の好まないようなことはしないように仕向ける。それこそいちいちそうするのではなくて、文化の魅力とかイデオロギーや、理念の魅力とかそういうもので、じわじわとそういうふうにしていくという漠然とした力のことです。

軍事力、あるいは軍事力のみならず強制力は、大国であっても生々しい形ではあまり使えなくなっているというか、いつでも使えるとは限らなくなっている現代の世界にお

いては、こういう力の重要性が高まっているだろうという話であります。これは今後の日本がどの路線を選ぶかということと直結します。もし日本が今後も軍事的な大国路線を採らないとすれば、やはりこういう力を高めていかないといけないだろう。というのは、アメリカなどと比べたときにこの方面での遅れが非常に深刻だからであります。そのためにも私の考えでは、自立性の回復がキーワードになるような気がします。というわけで、ここから先は、日本が嫌米とか反米とか変なことを言わずに、しかしなおかつ自立ということを考えていくにはどうしたらいいかという話をしたいと思います。

私は、日本の外交・安全保障政策で何が一番問題か、欠点かと言うと、それは例えばテポドンが打ち上げられたときに、どういう対応があったとかなかったとか、多分そんな話ではなくて、もうちょっと原理的と言いますか、根本的な話だろうと。それは、非常に、漠然と、抽象的に言いますと、自立した日本が自分の進路を自分で決めるという気持ちがどうも国民の間にない。あるいは指導者にもない。エリートにもないということではないかと思います。

私のイメージでは、外交とか安全保障は一番基本的に考えると日本という国に何かしら目指すものがある。目標を定めてその実現を目指していく。その目指していくときに、いろんな障害があればそれをできる限り排除する。そのためにさまざまな政策を採っていく。そういうのが外交・安全保障の根本だろうと思います。そしてその根底には、日本が目標を定めるに当たって自分の国をどういう国にしたいか、そして、自分の国にとってふさわしい好ましい世界はどういう世界か、そういう明確なイメージがあってしかるべきだろうと思います。けれども、こういうイメージもないわけであります。

今、言った二つのことと深く関係があるんだと思いますけれども、日本では戦後、健全なナショナリズムと呼べるようなものもどうもありませんし、いい意味での国益意識もないようであります。こういうさまざまなことの結果、恐らく外交や安全保障を考えるということが言われるときにも、目的意識が非常に稀薄な議論に終始しているのではないかと思います。手段論ばかりで目標論がない。例えば、昨今のガイドライン関連法の審議を見ていましても、ガイドラインはもちろん手段です。ところがそれをどういう目的のためにやるのかという議論よりは、手段が妥当かどうかという目的をあまり論じないで言っているようなところがある。あるいは、法律解釈というやっぱり手段論ばかり、そういうところが見られます。

こういうふうに、自分の進路を自分が決めるという気概がない。あるいは、自分の国をどういう国にしたいのかと言われても、何だかよくわからない。ナショナリズムや国益意識も欠けていて、目的意識もない。ということの根底に、どうも日本が自立性を持ってないというのがあるような気がしてならないわけです。

ただ、日本人にも自立していない日本というものに対するそこはかとないいらだちはあって、それが恐らくはここ10年弱ぐらいの間にいろいろ言われておりますけれども、日本には理念がないとか、顔がないとか、尊敬されない大国だという言い方に表れているのではないかと思います。

理念、顔、そういうのによく「独自の」というまくら言葉が付きます。これが恐らくは、日本では一本立ちしたところがなくて、それをどうにかして取り戻したいという気分の表われではなかろうかと思います。それでは何で日本は自立していないのか。それは、もちろん歴史的ないろんな経緯があるわけです。

近年はこういうことを考えている人もいないわけではないのに、具体的な話としては一向に自立という議論は起こってこない。それはなぜか。ここで一つ考えておくべきことがある。私は、今後、日本の安全保障とか外交を考える上では、自立した日本が自らの進路を改めて決定し直すことが必要だと思っています。国が国際社会で敬意を得るためには、自らの運命は自らの責任で決めるのだという意識がなければならないという議論を、以前誰かがしていたのを読んだことがあります。

日本はそういう意識を取り戻す必要があるだろうと思っていますが、問題は自立した日本が非常に慎重にあらゆることを考えに入れて合理的選択を行いますと、恐らく結果として選ばれる選択肢は、現在日本が採用しているものとほとんど同じものになるだろうということです。多分、微妙な面で違いはあるでしょうけれども。一番基本のところでは、日米同盟基軸路線ということです。今と同じものを選ぶのが、一番合理的になる。

これは、一面では現在の日本にとっては大変ラッキーであります。というのは、55年体制が崩壊してから、いまだに国内の政治的混乱は解消していませんし、有能な政治的リーダーシップが欠如しているという文句も至るところから聞かれますけれども、状況がすぐに改善するようには見えない。こういう政治状況の中で、日本は進路について選択を誤りにくいということがあるのでラッキーであります。

しかし、特に深く考えなくとも実は一番正しい道が選べてしまって、それなりにうま

くいくということは、（日本人に）根本から問題を考え直すきっかけをなかなか与えにくい。自立を目指すということを真剣に考える機会が生まれない。なぜなら、自立を目指すなんてことを考えずに漠然と現状維持をしていても、当面はとりあえずは問題が生じない。恐らくこれが、日本にとっては、さっき言った幸運の反面の大いなる不運であって、長期的には随分深刻な問題になるのではないかと思います。

今は自立を目指さなくても表面的にはとりあえず問題は生じない。表面的と言いましたのは、とりあえずうまくいっていても実はその背後にアメリカに依存する心とアメリカに保護されているという意識、それから、それらの裏返しとしての何となくアメリカに対して面白くなく思う感情、一種の反米感情。こういうものがあって、それがもやもやとくすぶることになるから、これも非常に深刻な問題です。

それでは、なぜ日本人は自立心とか目的意識を持っていないのか。最初から持っていなかったのか、それともいつごろからか失ってしまったのか。これについてはっきりとした結論を述べる能力は私にはございませんけれども、いろいろ考えてみますと、現在の日本人が自立心や目的意識を持たないことについて、いくつかの原因というか要因は指摘できると思います。

第一には、私は戦後の日本にも国家戦略らしきものはあった、少なくともある時期まではあったと考えています。が、それは非常に特異な性格なものだったということを指摘できると思います。よく日本には戦略がないと言われまして、現在の日本を見るとどうもそれはかなり当たっているように思わざるを得ないところがございます。しかし戦後をずっと見ていきますと、何も戦略がなくてあんなにうまくいくはずはないので、やっぱり何かあった。ただし、日本が戦後追求した国家戦略、あるいは路線は日本が選んだというのではなくて、歴史の偶然によって目の前に与えられたもの、選ぶ余地なく与えられたものだった。

私が考えるのは、戦後の日本は、経済復興と戦争の後始末とアメリカ側陣営の一員として安全保障を高める。この三つの目標を目の前に突き付けられてそれ以外を選ぶのは、イデオロギー的に特に偏った人は別にしまして、考えも付かなかった。当然のこととしてそれを追求してきたら非常にうまくいった。経済復興については、60 年代の終わりごろに、自由世界第 3 位の経済と言い出したころには目標は達成された。

戦後処理も、後になって、最近いろいろなことが出ていますが、60 年代の後半には、

例えば日韓国交回復とかああいうのに見られますように、大体片が付いて、日中国交正常化でほとんど一応始末が付いた。

冷戦が続いている限り、アメリカ側陣営の一員として安全保障をやるという目標だけは残っていたんですけれども、それも冷戦の終結でなくなって、その（戦後の日本に与えられた）国家戦略は、今や全く通用しないものになっています。

私がここで言いたいことは、戦後の日本は、自分で選んだのではなくて、与えられた目標、これをともかく追求していったら予想もしなかったほどうまくいった。それで25年とか30年やった。その間にうまくいかないことがもっとあれば自らの進路について、自ら考え直すということがもっとあって、そういう方面（自らの進路について構想すること）の能力、技術も向上したのかもしれませんけれども、そのきっかけが全くないままにそういう能力が退化したのではないか。

例えばオイルショックのときに少し、自らの運命について、自ら考えようという機運が盛り上がったように見えます。その一つの産物が、例えば総合安全保障の考え方であるような気がしますが、どうもオイルショックは比較的短期のうちに日本はうまく乗り越えてしまいましたので、従来からの路線を根本的に自らの手で見直すというきっかけとしては不十分な危機であったのではないか。そういう気がいたします。

日本としては、ずうっと従来の延長線上でやって、それでうまくいっている限りは、自らの進路を考え直すということを意識しないで済んだ。ところが冷戦が済んだことによって、根本的に話が変わってしまって、初めてどうするのかと言われ、どうしたらいいんだかわからなくなっている。で、10 年経ってしまったということではないかと思います。

そのように、日本の与えられた目標を追求する路線が大成功した陰には、もちろん日米安保体制がものすごくうまくいったということもあるんだろうと思います。この日米安保体制がともかくうまくいったものですから、そして、冷戦期には実は日本が自立すると言ったってソ連の脅威に対抗するのに、日本独自でというのは甚だ無茶な話ですからアメリカと一緒にやっていくしかなかったということもあります。安全保障はアメリカに頼るのは、ある種当然だということになる。そういうことがあると思います。

それとともに戦後日本では、軍事について考えることがある種タブー視される傾向があったり、ナショナリズムを言うことが悪いことであるかのように言われた。かといっ

て、日本がナショナリスティックでなかったかというと、そうではないんですが。普通の形ではナショナリズムが出せない国であり続けた。アイ・ラブ・マイ・カントリーと言うと右翼だと言われるという風潮が長く続いて、日の丸・君が代は、国旗と国歌かというと、どうもそうでもないんじゃないかということが何十年も続いた。

ちなみに、今回のあの法案（国旗・国歌法案）の提出のされ方も私はどうも釈然としなくて、政府の説明の仕方も、もうちょっと正々堂々とやればいいのにと思っていて面白くないんです。しかし、ああいうものが国旗でも国歌でもなかったというあたりが、何か今話していることの遠因の一つのような気がします。

それから、軍事について考えることさえいけなくて、ナショナリズムと言うのが間違ったことだという発想と関連して、戦後の日本人はパワー・ポリティクスからともかく逃げて、逃げて、逃げまくろうということでやってきた。これも日本人の自立心や目的意識を乏しくさせた原因の一つであると思います。国際的パワー・ポリティクスから逃避して日本が何を言っていたかと言いますと、どうも平和国家を目指すと言ってきたんです。これが私は非常にまずいんじゃないかと最近、思っています。

という言い方をすると誤解を招きかねないので、私は決して日本が平和国家でない国家になれと言っているのではありません。防衛大学何とかという肩書きがある者としては、重々皆様にご注意願いたいところです。私が言いたいのは次のようなことです。平和というのは、それ自体としては無内容です。どういう平和か。いかなる理念を大切にしたいのか。あるいは、いかなる現状を固定する平和かというようなことを言わないと、本当は平和はあまり内容はない言葉です。ところが日本は、平和国家とだけ言って、そこで考えるのはやめてしまった。

さらに言うと、平和国家というのには、手段のレベルで「平和的」手段を取らない国という意味と、目的のレベルで世界とか地域とかそういうところで平和を実現することに何か努力する国と、二つ意味があり得ると思います。けれども、日本においては平和国家を目指すと言いながら、どうもその意味は往々にして手段における平和国家といいますか、要するに軍事的な手段を取らない国というところに矮小化されていたように思います。

その平和国家という、実はあまり内容のない言葉を目標として掲げたようなことになって、そこで全て話をやめてしまうものですから、どうも私は日本外交から目的意識

が消えていったのではないか。平和国家を目指すということ以外は、国際政治の難しい部分についてあまり物を言わないで経済中心でやってきた。ここに問題があったんじゃないかという気がします。

ついでに言いますと、平和国家とある意味でペアになっているのは国際協調という話です。何が言いたいかというと、国際協調というのは手段であります。あるいは、手段であるべきものであります。国際協調自体が目的だということは、本当はないと私は思っています。何か自分の国が実現していきたいものがあって、そのためになるべく協調的にやっていくべきだというなら話はわかりますが、協調すること自体が自己目的化するというのは、何か不健全ではないか。ところが、日本の場合は国際協調の自己目的化が非常に顕著で、それは恐らくは手段のレベルでの「平和国家」を目指す。それをあまりにも言い過ぎたことと関係があるはずです。

私が言いたいのは、国際協調が大事であったとしても、本当は日本にとって何か譲れない一線とでも言うべきものがあって、そこを越えたらやっぱり協調はできないということでなければ、本来おかしい。そういう意識がなければいけない。ところが、どうも日本にはあまりそれがない。だから、北朝鮮に対してさえ、何かあると、ともかく協調せよという議論が出てきたりする。そういうことになっているのじゃないかと思うわけです。

こうして見ると、戦後日本ではわりと早い時期に自立心とか目的意識が消滅したのかという話で、私も最初そう思い込んでいたんですが、どうもそうではないんです。最近、必要があって、30 年ぐらい前の日本の安全保障とか外交に関する議論を少し読むことがありました。その結果初めて知ったのですが、どうも 60 年代後半から 70 年代頭にかけては、アメリカと協調することが大事だと言っているような、いわゆる現実派の人たちが、そうは言ってもしかし、どうやって日本の自立性を残していくか、確保していくかが大事だというようなことをしきりに論じ、悩んで、考えています。例えば NPT が日本の外交安全保障戦略に関して非常に大きい主題だったのは、そのころです。核防条約と、当時は言いました。核防条約に入って、なおかつ、自立性を持てるかどうかということが非常に気にされていたんです。

ですから、30 年ぐらい前はアメリカ一辺倒とか、アメリカの決めたことにただただ従っていればいいという考え方は、現実派の論客、あるいは政治家、あるいは外交官の

間にもなかった。あるいは、そういう考えは非常に希薄だったように見えます。ちゃんと自立心というものがあって、ただそれは現実には非常に難しいので、一体、どうやったら、これから日本もようやく一人前に戻ってきたし、自立というものを回復していけるんだろうと真剣に考えていた。

ところが 30 年経って何が起こっているかというと、特に名は挙げませんけれども、外務省のさる非常に高い位にある人が、私の出ていたある研究会で、日本はやはりアメリカの決めたことに付き従うという面があると言わざるを得ないんじゃないかと質問されたことがあります。この質問に対して、その外務省高官は、残念ながら、それはまことにその通りであると答えた。その答えに対して、その場に出席されていた私以外のほとんど 50 代、60 代の年配の方々は、全く異論ないという調子でうなずいている。つまり、そういうことなんでしょう。

そうすると、30 年前にはあったはずの自立への欲求が、一体、いつ、いかにして消滅したのか。これは、本日、私としては、お話しすることができない謎となっているんです。この辺も考えてみる必要があるかもしれません。ちなみに私には、30 年ぐらい前に、そういう発言を少ししていたこともある身内がいますので、一体どういうことなのかと聞いてみたら、なるほどそう言われてみればそうだと言って考え込んで、よくわからないらしいんです。

かなり時間がたってから次のような答えがあった。当時、一生懸命そういうこと（日本の自立の問題）を考えていたことは確かだが、なぜそういう議論が消えていったのかはよくわからない。ただ、断片的にもしかしたら次のようなことは言えるかもしれない。あのころ日本がだんだん上昇気流に乗って、アメリカはベトナム戦争で負けて、自立だ自立だと言っていたらアメリカのアジア離れとか言われて、慌てて、いや、やっぱり自立なんてとんでもないと思ったのかもしれない。

あるいは、経済的に成功して何だか安心してしまったのかもしれないというようなことは言っておりましたが、ちょっとよくわかりません。よくわかりませんのですけれども、30 年前には、今私が話しているような問題意識に近いものを、恐らく多くの方が持っていて、これから先はアメリカと協調はやむを得ない、そして、それはいやなことではないんだけれども、その中でアメリカべったりでないようにするにはどうするかということが考えられていたはずです。私は、そこに今、戻らなければいけなくなってい

るのではないかと思います。

それではどうすれば自立できるのかという話になります。これは、端的に言うと、理論的には一番簡単なのは、軍事的に自立して「普通の大国」になる、という話であります。普通の国ではなくて、「普通の大国」という言葉を使っているところが若干、微妙な違いがあるつもりです。軍事的に日本が自立をして「普通の大国」になれば、いやでもよその国も日本を一人前に認めて扱わざるを得なくなります。ただし、これには非常に大きな経済的のみならず政治的なコストがかかりますので、得策ではないと思います。

得策ではないと思いますが、先程、冷戦期には、ソ連の脅威の前では日本だけで防衛するのは無茶な話だったと言いました。しかし冷戦後には、恐らく理論的には、軍事的自立によって日本が「普通の大国」になる可能性が初めて出てきていたのではないかと思います。このことを日本人が認識することは、私は大事であるように思います。

私が言いたいのは、日本が自立への道として取るべきなのは、軍事的自立によって「普通の大国」となる道もないわけではないということをちゃんと意識した上で、あえて日米同盟基軸の ―いささか変な言葉ですが― 「軍事中級大国」路線を貫く、そういうことなんじゃないかと思います。

ここで言いたいことは何かと申しますと、軍事的に自立をしないでアメリカに依存する。そしてその結果、ある意味では中国に対しても対等の立場に立たないということは、日本としては必ずしも喜ばしい選択ではない。もっとはっきり言えば、日本は我慢しているわけです。日本がこの点であえて我慢しているということを日本人自身自覚するとともに、よその国にちゃんとアプリシエート(appreciate)させるということが、これから必要になるんじゃないかと思います。もちろんそこには外交技術とかいろいろ難しい問題がありますが、それは外務省のプロに任せるということであります。

こういうふうに、日本にはほかの道もあるのだけれど、自らの意思で日米同盟基軸、いわばこれまでの路線の維持をしているんだ、しかしそれがアプリシエートされないなら、必ずしもこれでなくてもいいんだという意識を持つことによって初めて、どうも私は、米中ロ（といった大国）に日本を対等な存在として認めさせるきっかけが生まれるのではないかという気がしてます。

米中ロに日本を対等な存在として認めさせて、伝統的な意味での大国とは違う、ですから「普通の大国」ではないのだけれども、確かに大国だということを認めさせて初め

て、日本の国際社会における貢献あるいは役割が、アメリカをはじめとする伝統的大国のそれとは質的に異なったもの、つまり非軍事的側面を中心としたもの、そういうものであることを初めて日本として正当化できるようになるのではないかと思います。

従来日本は、非軍事的役割を中心にやっていくべきだという主張はありましたけれども、必ずしもそれは国際的に説得力を持っていない。他国からは、身勝手な主張だ、きれい事ばかり言って、汚いことはよその国に押し付けるのかという言い方をされている。しかしながら、日本には「普通の大国」になって汚いこともきれいなことも普通に引き受けるという道もあるけれど、自分の国のこと、周辺諸国のことを考えるとそうしないことが賢明だと日本としては判断する。日本はそう思うし、周辺諸国もそれをアプリシエートする。そういうことになれば、普通でない大国としての日本には、普通でない大国としての貢献の道が当然認められることになっていくのではないか。そういう気がしているわけであります。

もう一回言いますと、日本には軍事面を含めた自立の選択肢もある。これは、そうすべきだと言っているのではありませんから、繰り返し注意申し上げます。私は、そうすることは大変に愚かしいことだと、自分では結論付けています。しかし、そういう選択肢もあるんだけれど、愚かしいから、つまり自国の国益の観点から見て、よくないから、それをしない。しかも、実は、それだけではなくて、国際秩序の安定のためにもよくないからそれをしない。

つまり、日本がこれから軍事的に自立して「普通の大国」になるということが国際政治の上で何を意味するかと言いますと、北東アジアあるいは東アジアにおけるパワーバランスの急激なシフトということになります。しかし、歴史はそういうことが起こるとどうもあまりよくない、非常に不安定な状況になるということを教えてきた。恐らく現在の日米中関係を考えますと、日本が自立の選択肢を選びますと、非常に不安定な関係がそこに生まれてくることはかなりの確率で避けられないでしょう。

ですから、日本は単に自国の国益のためだけではなくて、国際秩序、アジア秩序の安定のためにも（軍事的独立を）我慢する。そして「普通でない大国」としてやっていく。その結果どうなるかと言うと、やっぱり日米同盟基軸で行く。日本人が、そういう道を自分で選ぶのだという意識を持って、そして、よその国が、日本のその選択は、なるほど日本にとっても正しいんだろうけれども、周辺諸国、自分たちにとってもためになる

ことだということを認める。こうして初めて、日本人が望んでいる、軍事的には中級国家に留まって、なおかつ大国としての尊敬される地位をかち得るということが可能になっていくのではなかろうかと思います。そしてまた、さっきも言いましたように、独り善がりではなく、日本の国際貢献は大国であっても非軍事面を中心としていくべきだという主張ができるようになるのではないかと思っております。

ここで突然、他人の名前を出して批判するのはいささか気がひけますが、例えば、船橋洋一さんのグローバル・シビリアン・パワー論(global civilian power)。私は、あの考えは面白いと思うけれど、大きい弱点があると思っています。それは何かと言いますと、アメリカがグローバル・ミリタリー・パワー(global military power)の役割を果たしている。そして、イギリスとかフランスといったアメリカに次ぐ大国も必要とあらばそれに協力するというのが、あの議論の暗黙の前提とされています。ある種、当然のこととされている。

それから、日本がグローバル・シビリアン・パワーになる、そういう役割を担うということは当然世界に歓迎されるということになっている。でも、そうではないはずです。一般には、大国であるなら大国としての普通の責任を果たせというのが普通であります。そうでなくてもいいんだというためには、日本なりの理屈が必要なはずであります。その理屈としては、日本が「普通の大国」になることは、自らのみならずよその国にとってもためにならない。だから我慢をする。我慢をするけれど、日本はやっぱり大国として、ちゃんとやっていきたい。それが認められないなら、普通になる可能性だってないわけではない。でも、なりたくはないんだ。どう思いますかと、むしろ世界に問い掛けることではなかろうかと思います。

アメリカや中国はストレートには言わないでしょうけれども、やはり日本には普通でない大国としてやっていってもらったほうがいいということを他国が承認した時点で、グローバル・シビリアン・パワーとグローバル・ミリタリー・パワーの分業ということが初めて前提にできるのであって、これを暗黙の前提にしてはいけないと思います。これを暗黙の前提にしてしまっているので、船橋さんの非常に優れた理論が、その他の人々がいろいろと唱えている、日本は何だか特別な国だという議論と似通ってしまっているのではないかと思います。

ちょっと話が抽象的でありますが、日本にも自立の欲求はあって、90 年代に入って

から出てきている、日本は「独自の」理念を掲げるべきだという類の、日本特別論とでも言うべきもの、それから石原慎太郎先生に代表されるように、いわゆる嫌米とか侮米とかいう類の議論、それからはるか大昔の非武装中立論、ああいうのは全て、主張している本人もはっきりわかっていないのかもしれませんけれども、私の言葉で言えば自立への欲求であって、さらに言うなら、ナショナリズムが何だか歪んだ形で噴き出しているということではないかと思います。

自立への欲求がそういう形に集約されていってしまうと、日本にとっては、大変なディザスター(disaster)である。日本が目指すべきなのは、親米自主とでも言うべき路線であって、それを基軸にして親米自主のもとに、少し変な言葉ですが軍事中級大国、軍事的にはミドル・パワー、しかし大国だという大国に何とかしてなる。単に物理的にそうだと自己主張するのではなくて、それを世界に認めさせる。いわばこれは、普通の国にはなるけど、「普通の大国」にはならないという路線ではないかと思っております。

もちろん、そういうことを世界に訴え、受け入れさせるということは非常に難しいことであって、そのためには優れたリーダーシップと優れた外交技術が必要になります。このことをまじめに考えますと、どうも現在、あまり楽観的にはなれないというか、暗い話が多いような気もします。しかし、この辺は、日本人はやがて底力によってこういうものを取り戻すだろうと期待することにしたいと思います。期待しないと、やっていられないということであります。

最後に、さっき、日本にとって例えば国際協調を目指すといっても譲れない一線がなければいけないだろうと言いました。譲れない一線というものをはっきりさせて、それを大事にするということが、恐らく自立ということと非常に関係が深いだろうと思います。

譲れない一線とは何かというと、日本が非常に大事だと思う、かけがえのない価値体系、ものの考え方とか価値、そういうものの集大成としか言いようがないわけです。こういうものを大事にするというのが、まさにナショナリズムということだろうと思います。そうはいっても、相互依存が深まっている今日、ただナショナリズムと言ってもアナクロニズムみたいに聞こえるかもしれません。ここで私は、漠然とした言葉ですけれども「中庸を得た健全なナショナリズム」を獲得することが日本にとって必要ではないかと思っているわけです。

それはどういうものかと言うと、日本には譲れない一線があるけれど、よその国にも譲れない一線というものはそれぞれあることを基本的には承認する態度のことです。もちろん、譲れない一線があるわけですから、よその国の譲れない一線も自分の国の譲れない一線を越えたらもう承認できないんですけれども、そうでない限りよその国の譲れない一線、つまりナショナリズムを可能な限り許容していく。そういう自己抑制的なナショナリズムを、私は中庸を得た健全なナショナリズムと呼びたい。

そうなるためには、まず日本人が、日本を日本たらしめている文化、価値、常識、慣習、制度といった、そういう体系に大切さを感じている、誇りを感じている、かけがえのなさを感じていることが必要で、そういうものを維持発展させたい、守りたい、そういう中で生きていきたいと思っている。そして、それが危なくなったときにはそれを守るために行動するという意思を持っているということ、これが重要なことは間違いありません。

それと同時によその国民も同じようにかけがえがないと思っている価値とか文化を持っていて、それを守りたいと思っているのだし、守るために行動をする用意もあるんだということを知っていて、なるべくそれを尊重して、うまいことネゴシエーションというか、妥協等によって、折り合いをつけていきたい。こういう態度をどうやって取り戻していくかというのが、日本人にとってこれから課題になっていくのではないかと思います。

こういう意味でのナショナリズムが取り戻せたとしますと、日本人にとって、日本をある意味で日本たらしめているものたち、価値とか文化、そういうものを守るということが非常に重要な目標になるのは当然のことであって、それが安全保障の大基本だという言い方は、過去にいろんな方が言っていらっしゃったように思います。ですからナショナリズムが健全な形で取り戻されると、そこに自動的に安全保障が国家の最も基本的な責務だという感覚、認識も自動的に戻ってくる。そして、こういう感覚を持っている国民には、世界にはいろいろな国がある。それらの国々の上に立つ世界政府はない。そういう状況において、自分の国の安全や繁栄をどうやって確保するかというと、最終的には自分の国の譲れない一線ということを大事にして自分の国が行動するしかないんだ。そういう意識も芽生えてくるのではないか。ここに、国家は国益のために行動すべきだ、国益を実現するために行動すべきだという認識も出てくるのではないかという気がいた

します。

ただし、よその国にも同じような考え方があるということを承認している以上、そこで言う国益は狭い意味での国益というよりは、広い意味での国益と最近われわれが呼んでいるものになるのだろうと思います。

はしょりますが、こういう中庸を得た健全なナショナリズムとそれに基づく国益感覚を持って初めて、次のような外交安全保障感覚を身に付けることができるのではないかと思います。それは、外交の基本的な目的が、広い意味での国益の追求にあることを認める態度が一番基本になって、その上で国益を実現するにはなるべくよその国の国益との間に折り合いを付けて、対立・対決は避けて協調していくことが大事だという態度が生まれる。しかし、お互い譲れない一線を持っている。それぞれが大事に思う文化や価値や常識の体系を持っている。並び立っている、どれが正しいということは決められないし、その上に立って、どれが優れているか決めてくれる世界政府もない。

そうだとすると、場合によっては自分の国益の主張が、よその国の国益の主張と決定的に対立することもあり得る。その場合には、協調では済まない。もちろん争いをエスカレートさせないことは大切であるけれども、毅然とした態度でもって自分の国の立場を主張し続けることがその場合には必要になっていく。

そういう感覚が取り戻せたとなると、私がさっきから言っている自立性ということも、おのずから高まっていくのではないか。どこが頭で尻尾だか最後のほう、話がわからなくなりましたが、もう一回ラップアップいたしますと、今後の日本は、私は外交といい、安全保障といい、いかにして、自立性を回復するかというのが基本的な問題だと思っています。

ただし、自立性を回復した日本が、改めて自分の進路を選んだとして、これはかなりハイポセティカル(hypothetical)な言い方で、実際には全てをちゃらにして一から選び直すということはできないわけです。ですから仮にそういうふうに（日本が改めて自立的に進路を選んだとして）したとして、今までと全く違う、何か素晴らしい、新しい道があると考えるのは幻想である。

ここでは、細かい点は全て省きますけれども、日本にとって賢明なのは日米同盟基軸路線ということにどうも変わりはない、少なくとも予見し得る将来においては。ただし、自立した日本があえてその道を選んでいるという認識を持つこと、そしてそれをよその

国にもわからせるということが、恐らく非常に大切なことです。それが、日本だけが勝手に自立すると言っているのではなくて、よその国にも日本が自立した、普通ではないけれど大国なんだということを認めさせていける鍵になるのではないか。

そして、そういうことができて初めて、よく日本で希望的に語られる日本は大国だけれどアメリカやイギリスやフランスのようにはやらない。日本の今までやってきた道を大事にして、そのやり方の延長線上で大国として貢献する。こういうことが初めて、国際的に認められたものとして可能になるということであります。

甚だ、まとまりがありませんが、以上です。

3. 質疑応答

司会　神谷先生、どうもありがとうございました。

それでは早速、質問あるいはご意見をいただきたいと思います。挙手をお願いいたします。

A　私が興味を持った概念は、1ページ目にあります、コ・オプティブ(co-optive)という概念です。実は、私が大学院時代にイギリスにいましたときに、湾岸戦争が起きて、日本が兵を出さないということで、ものすごいイギリスの中で批判が起こりました。そのときに、憲法9条があるということをマスメディアのほうが伝えずにかなり報道が活発に行われたために、日本に対する非難が随分起こったことがありました。それが私のジャーナリストの道につながっていくことにもなりました。

フランスやイギリスを見ますと、イギリスのブリティシュ・カウンシルでも、またフランスのフランス語を広めようというような学校とか、ドイツのゲーテ・インスティテュートとか、いろいろ自国のコ・オプティブ・レベルを高めるために、文化的なドグマも含めて、メディアも含めて、いろんなことを各国がやっているという感じがする中で、日本はそれが欠如しているという印象を持っております。

今神谷先生がおっしゃった、軍事中級でも大国と各国からみなされて、コ・オプティブなレベルを上げるためには、具体的には外交以外の面も含めてどんなことがなされなければいけないとお思いでしょうか。それをお尋ねしたいのですが。

神谷　まず、例えば湾岸戦争のようなことが起こったときに、日本は戦わない、戦うというレベルでは貢献をしない。それが日本の希望でありますし、恐らく普通の日本国民は、それが正しいと言いたいのだと思います。しかし日本が、例えば、憲法9条があるから日本は戦わないんだと言っている限り、よその国がそれを認めないと言えばそれでおしまいです。尊敬は勝ち得られない。ソフトパワーかコ・オプティブ・パワーかどちらのことばで言うにしても、こういう力も高まらない。

やはりそれは、日本が大国だけれどそういう方面では貢献しない国として世界に認められるということがあって初めて、現在の進路を取ったままの日本というものが敬意を払われる国になり得るのではないかと思います。

例えばノルウェーのことを思い浮かべていただくと、あの国は国連の平和維持とか予防外交に活発に活動しております。たまたまあるプロジェクトで、私、あの国に行きま

して、政府のそういう分野の担当者としゃべりましたところ、紛争の予防には軍事も非軍事も大切だ。ただ、うちの国は小さいですから軍事的な外交はできませんから非軍事的貢献ですよ。皆さんもそう思うでしょうと。それで世界も納得しているわけです。ノルウェーが、湾岸戦争で兵隊を送っていたら、ごめんなさい、多分、送ってないと思います。ほとんど戦わなかったとしても、誰も文句を言わない。あの国はそういう国であって、そういう国としてやるべきことをやっていると皆が思っているからです。

日本の場合は大国である。とすると、大国というものはいざというときは戦争もするものだ、国際協力という名の下には。そういう常識が世界にあるときに、どうやって戦わない大国ということを認めさせるかというのが基本になっていくのではないかと思います。

さもなければ日本としては二つしか道はない。戦う大国になるか、それは私の言う「普通の大国」路線です。そうでなければ、尊敬されるとか、コ・オプティブ・パワーということは言うのはやめて、それこそアメリカ様にお世話になって生きていく。何か最近、アメリカのやり方には面白くないことが一層増えてきているような気もするけれど、それは言わない。これら二つの道のどっちもいやだとすると、現在日本がとっている道が日本の独り善がりでないということを何とかしてアクセプトしてもらうようにするしかない。

そのための理屈として、無理ではなくて、多分、一番普通に言えるのは、日本が「普通の大国」を目指すと周辺諸国が懸念するとかそういうことではなくて、（それによって力のバランスが急激に変わるので）日米中関係が不安定になる。それは非常によくない。そういうことではないかと思います。それが、一番基本です。

A　神谷先生がおっしゃる大国というのは経済の面から見た大国とか、あるいはポリティカル・インストルメンツという部分での大国とか、どういう概念での大国と理解したらよろしいんでしょうか。

神谷　ですから、経済とかを基本にした物理的能力があれば、まず能力レベルでは大国なわけです。ただ、それが実際の大国の地位につながるかどうかというのは次の問題です。能力的には大国である日本が、なぜ大国としての普通の行動様式をとろうとしないのか。とらないことが正当化されるのか。問題をまず何らかの形で解決しませんと、日本が独自の理念とか、文化というものをいくら訴えていっても、根本のところであの

国はインチキだということになってしまうのではないかという気がします。

つまり、日本は大国としての責任を果たすことから逃げているように見える。しかし、それは逃げているのではなくて、自分のためでもあるけれど皆のためを考えて我慢しているんだという理屈がいいのではないかと思います。その上で、例えばブリティッシュ・カウンシルに当たるものをもっと作るとか、そういうことも私は必要だと思います。

例えば、アメリカの各地に、日本に言うアメリカン・センターみたいなものの日本版を 10 個ぐらい作ったら、どんなにいいことかということは、私が同僚の教官と去年アメリカに行って各地でしゃべっていたところです。

A　どうもありがとうございました。

B　最近、私も安全保障戦略について考えなければいけない状況に直面しまして、こういうときの例に漏れず、アメリカではどういう枠組みを使っているのかというのを調べてきました。DOS が出していたステイト・ストラテジック・プラン(state strategic plan)があって、そこでは、まずナショナル・インタレスト(national interest)を設定する。それはナショナル・セキュリティ(national security)をはじめとする七つです。その下にストラテジック・ゴール(strategic goal)があって、目的とすべき状態、その下に運用目的、オペレーショナル・ゴール(operational goal)があって、それはその状態を実現するための手段。その下に、オブジェクティブ(objective)、個別具体的な政策が出てくる。

今の神谷先生のお話は、例えば、軍事中級大国としての外交安全保障路線は、ここで言うところの状態を実現するための手段、オペレーショナル・ゴールである。それで具体的にどのような国際秩序、東アジアの国際秩序を実現すべきだと考えているのかということをお伺いしたいんですが、

神谷　ナショナル・インタレストがあって、ストラテジック・ゴールがあって、オペレーショナル・ゴールがあって、何でしたっけ。

B　それから、オブジェクティブです。例で挙げられていたのが、例えばストラテジック・ゴールにあるのが、WMD の拡散や通常兵器の拡散による地域情勢の不安定化からくる脅威の除去、オペレーショナル・ゴールにあるのが、軍備管理や技術管理などの他国間利潤の強化、最後に来るのがとりあえず今はパットオフしようという話になります。これはすごくイミディエート(immediate)な話です。もうちょっとジェネラルに広げて

いくと、恐らくここで言う外交安全保障路線はオペレーショナル・ゴールに当たるであろう。

神谷　これは、議論はあり得るところですけれども、日本が軍事的にはミドル・パワーである大国を目指すという話は、日本をどういう国にしたいかという話ですから、私はオペレーショナル・ゴールよりももっと高位の目標であると考えています。もしかすると、一番根本目標かもしれない。日本人が本気でこうしたいのであればですけど。私は、こうしたいという人が多いように思うし、自分としても、日本がミニ・アメリカになればいいという気もしないので、一つの可能性としてこういうのをやってみるというのは、いいのではないかという気がしていますけれども。むろん実際には、もうちょっと議論とソフィストケート(sophisticate)しないと使い物にならないとは思いますが。

ですから、こういう国になりたいというのを、私は、ある種の、今出た言葉で言えば、ナショナル・インタレストかな。それに当たると思うのです。でも、アメリカの場合は、自分の国がどういう国になるかという話は、もう話が付いていて、国民の間に広いコンセンサスがあって、その上で、外にどう働き掛けるかという話をしているので、ちょっとレベルが違うと思います。日本の場合もそういう話をしたからといって、具体的な政策のレベルで根本的に話が変わるわけではい。例えばアジア太平洋では、多国間の協調的安全保障的な枠組みを一方で発展させつつ、日本、アメリカ＋α、―＋αは例えばオーストラリアとか韓国がその候補です― ＋αによる同盟的なもので、パワーを供給するという二本立ての地域秩序構想でいくしかないと思います。そこは変わらないと思います。

しかしその前に、日本はどういう国になるのかというところをはっきりさせないことには、その秩序の中で日本がどういう役割を担うかという話がいつまでたってもふらふらする。日米の役割分担という話にしても、一体何をどうする気なのか。国民にわかるわけはないと思います。一見、何だか軍事的な役割を拡大するように見える議論が行われているけれど、よく聞いてみると、憲法の枠内で従来とあまり変わらないんだということを言う。これ、例えばアメリカ側で何人の人がそれ（日本での議論）を理解しているかというと、Cさん、よくご存じだと思いますけれども多分 30 人ぐらいでしょうか。

C　ある人は、8 人と言っています。

神谷　アーミテージとマイク・グリーン、モチヅキと誰だろう。数え切れるという説

があります。やっぱりそれでは困ると思います。日本はこれまでの国際常識でいうと、何か変なことをしているけれど、それはもっともな理由のあることなんだと世界に思ってもらわない限り、まあ、別に国際社会で尊敬なんかされなくていいという立場をとってしまえば別ですけれど、一応、尊敬される国際社会のメンバーになりたいというのであれば、その道はない、そういう可能性がないと思います。

D　若干、似たような質問だと思います。先生がおっしゃった状況に持っていく常道、そういうものはどういうことが想定されるかということです。Bさんのおっしゃったことと頭に浮かんだので、伺いたいと思ったらお答えになりましたのでよかったんですが。一つは先程も出ましたが、憲法に沿って今回の周辺事態法を見てみると、アプレオリに必要だという野党はほとんどなくなって、一応、必要だという議論はしたんですが、法律論議にとらわれて、アメリカから見るとせっかく間口を広げて協力してくれるのかなと思ったら国内に持ち帰ると、またどんどん小さくなっていくという印象を受けたというふうに聞かされるわけです。

憲法の議論は、一つの通過儀礼として、おっしゃったような方向へ進むために必要なのか。それとも別の認識が決まっていけば、憲法問題はそのイッシューとならずに落ち着くところに落ち着くとお考えなのかということです。ちょっと抽象的ですけれど、どういうふうにしていけばそういう状況に近付けるかと。

神谷　防衛庁関係者に憲法問題の議論はなかなか難しいのかもしれないのですが、昔ほどヤバくはないので、精一杯のことは申します。

まず個人的に言うと、私は、憲法9条は最初は押し付けられたものかもしれないけれど、どうも日本人の大半は基本的には悪くないところが多いと思っている。変なところもあるけれど、悪くないところが多いと思ってやっているのだし、国際的にもある種のいい評価も受けているので、何もそんな毛嫌いしてなくさなくてもよかろうというのが、個人的な立場です。

ただし、微修正さえも必要ないかというと、これはちょっと疑問なところがあります。修正するとすれば、何か付け足すという意見が一つあります。小沢一郎さんなんかそうです。北岡伸一先生なんかは、第二項削除というんです。そっちのほうが、もしかするとシンプルかもしれません。そういうことは考えられるのではないかと思います。ただし、今、条文は現状のままで解釈を変更するという道もなくはないとは思います。いず

れにしても、一度そこをはっきりさせておくことが必要ではないかと思います。

まさに、憲法 9 条は、日本がこれから、どういう大国になるかを分ける根本的な規定になると思います。ところで、日本について大国大国と言っていますが、話は脱線いたしますけれども、島田晴雄先生の説によると日本が高度経済成長したのは長嶋がデビューしてから引退するまでの間の 17 年だと、正確な年数はちょっと忘れましたが。その伝でいうと 17 年間もたもたしていると、大したことない国に戻るという話を、4 年ぐらい前にとあるところでされたのを聞いて、皆でああそうですかと言って笑っていたんです。それからまた 4 年経って、すでに 8 年ぐらい経ったんじゃないでしょうか。

だから、あと 8〜9 年もたもたしていると、日本はあまり大国でもないしどうってことない国で、尊敬も何もないなあということになるかもしれませんが、そういう悲しいことにはならないと仮定した場合に、「普通の大国」になるかそうでない道を選ぶかを分ける根本的な規定になると思います。そこについて、日本人が考え方をはっきりさせるということはどうしても必要なことなのではないかと思います。

極端な、変な解釈をしない限り、憲法 9 条で言っていることにはいいことが多いというのは、私の個人的な考えです。要するに侵略戦争をしない、勝手に武力を使わないというのは、ある意味では今や国際的な共通の規範ですから、それをうたっておくというのはいいことであると思います。

大国がそういうものを尊重することを特に前面に押し出すことも、もし他国にうまく受け入れてもらえるならば意味がある。ただしそれを日本が勝手に独り善がりでいくら言ったって、何の意味もないという気がしております。

C　神谷先生の話、大変面白かったんですけれども、僕、神谷先生よりちょっと年上だと思います。従って、ちょっと感じが違うんです。質問じゃなく、感想というか、先生のコメントもあれば、ほしいんです。

一つは、自立した日本とか手段論ばかりで目標がないという議論ですが、自立した国で自分たちの進路は自分たちで決めるという気概を持っている国がそんなにあるんだろうかという気がします。アメリカと中国とフランスぐらいかなというのが僕の感覚です。間違っていたらごめんなさい。

もう一つは、手段ばかりで目標がないということも、しょせんは安全保障とか外交とか手段であって、むしろ国際協調が手段でなく目的化しているという先生のご指摘もあ

るように、例えば憲法も、われわれのツールであるはずなんだけど目的化しているというところで、話が逆の面もあるような気もします。

目的がないというのは、僕らジャーナリストは何か文句を言うとき一番簡単です。このペーパーには理念がないとか、戦略がないとか、そんなことを言うのは何も言えない文句を言うときの常套句です。よく某新聞なんか書いています。ないか、あるかと言えば、僕は知りませんけれども、政府はそれなりにもっともらしいことを、総理の所信表明を見ると、今の総理は、富国有徳とか言ってます。船橋さんの話を聞いて、それはそれなりに、有力なジャーナリストが出した目標かもしれない。最近、あまりそういうことは言ってらっしゃらないようです。そういうものは、いろんな議論としてはあるのではないかと思います。何が言いたいかと言うと、あまり、そういうことを意識することはどういうものかなという違和感を持ちます。

もう一つは 30 年前にあった自立への欲求が、いつ、いかにして消滅してしまったのだろうかということです。僕もわかりませんけれども、僕のゲス(guess)は、30 年前は冷戦の勝負が付いてなくて、多分、片方の側に立って戦っていたから、神谷先生の身近な方なんかがあまりアメリカ側にコミットするのもちょっとかっこ悪いなと、二股、保険を掛けていたみたいなものです。勝負が付いてしまうと、自立とか何とかいう必要がなくなったのではないかというのが僕のゲスです。

三つ目のコメントと言いますと、軍事中級大国という言葉です。これ、ちょっとわかりにくい言葉だと思います。誤解されやすい。軍事大国の、軍事がどこに掛かるか。中級に掛かるか、大国に掛かるかということです。日本の生き方は、軍事力の規模で別に定義する必要はないのではないか。もうちょっと、それこそグローバル・シビリアン・パワーみたいに格好よくなくてもいいけど、もうちょっと何か洒落た表現がなかろうかという気がします。以上、3 点です、失礼しました。

神谷　最後の点から言いますと、私、グローバル・シビリアン・パワーはいささか理想的に過ぎる部分があるけれど、基本的には面白い話だと思っております。ただ、グローバル・ミリタリー・パワーとしてのアメリカ側が前提とされているのに、ほとんど書いてないじゃないか、少々ずるいというのがだいぶ前にあれを一読したときの印象です。逆に、そこをうまく解決できない限り、あれは日本の独り善がりと言われてもしょうがないんだろうというので、少しお名前を挙げて言ったわけです。

ですから、私が軍事中級大国というときにイメージされる貢献の内容は、船橋さんがあそこに列挙されたようなことのかなりの部分が中心になっていくのではないか。つまり、大国は、世界秩序などに責任を持つ。あるいは世界をよりよくすることに責任をもつ。大国というものがいいことをすると仮定すればそういうことになるわけです。

その際に、もちろん軍事面、経済面、さまざまな側面がある中で、軍事面については関与をミニマムに止める。それ以外のところで活躍するわけですから、まさに民生部門中心ということになるのではないかと思います。

ただ大国と言えば、軍事的にも大国であるというか、大国並みの国力が付けば、軍事的にも当然、大国化するんだというのが、キッシンジャーとかブレジンスキーとかに代表されるアメリカにおける主流派、アメリカに限りませんね、欧米主流派の常識でありますので、大国であって軍事的には大国にならないことをあえて強調する。そんなことぐらいになります。

自立した日本が自らの進路を自らで決めると言ったって、そんな国が幾つもあるかと言われると、確かにそれはそんなにないですね。ただし今、いわゆる大国ないしそれに準ずる国というと、アメリカ、中国、ロシア、イギリス、フランス、日本、ドイツぐらいまでが本当のところです。サミットには、イタリアとかカナダとかいますが、こんなのは大国とは言い難いと思います。

そうすると、今の七つの国で、ドイツはまだちょっと怪しいところがございましょうけれど、P5 の国はそれなりにそういうところがあって、日本もこれから先、国際社会で国力相応の役割を果たして尊敬されたいとか、これは、あらゆる立場の人が近年言うようになってますから、日本国民の多数の希望だと私は解釈しております。

そうだとすると、今や、日本は P5 的な心構えを持たないと、多分だめなのではないか。大国並みの国力をこれから使って何かしていくというときに、自分で使い方についてちゃんと判断しているというところがないのではちっとも尊敬されっこないという話、問題意識です。

目的意識の欠如というと、安直だ。まことにその通りではあります。ただ日本の場合、特に外交というか安全保障のほうでは、何のためにということを言わな過ぎる。外交も実はそうです。さっき、国際協調が自己目的化していると言いました。ともかく協調が大事だとお題目のように、それこそ某新聞が繰り返していますが、某新聞に限らない。

某政府も繰り返すように思います。

でも、本当は何か国として目指すものがあって、それを目指す上で協調できるのか、できないのかというのを判断するところが重要になってくる場合も多いはずなので、やはり目標論がない。ないと言うとちょっと言い過ぎですけれども、希薄だということは多くの場合言えるのではないか。

あるいは、援助政策を見てもたくさん金を出している。そして、一部の人が全然役に立ってないとか逆効果だとか論じていますが、それは言い過ぎで、多くの場合、確かに現地では役に立っている。しかし、全体として見ると何のためにたくさん金を出しているのか、日本人にわからないくらいだから、多分、よその国の人にはもっとわからないだろう。こういった話は枚挙にいとまがないわけです。日本の場合は、単なる決まり文句と言う以上に、外交とか、エクスターナル・ポリシー(external policy)です、外交、安全保障をくくれば。この分野では目標意識はないのではないかと思います。

E　単純な質問です。今、ノルウェーとかスウェーデンを例に出しておられました。コソボの NATO の攻撃については、ノルウェー含めて賛成をして、加害の立場を共有したと思います。つまり、尊敬される国であってもやるときはやるんです。だけど、先生のお話でいくと、軍事中級大国という立場でありながらあえて非軍事的な役割という理由は何でしょう。

ということは、冷戦の時代だと別な問題だと思いますが、今の時代になるとかなりグローバルな規模でものを考えなくちゃいかんということは必要になっているわけです。そうすると、場合によっては別に私は小沢さんと同じではないんですけど、結果的には同じ立場を取る必要が出てくるのではないかと思っているわけです。

コソボのように、ある面でいくと戦後の社会秩序を崩そうとする明らかな国連中心主義に対する挑戦だと思います。国連抜きでやるからにはね。そういう意味では、世界史的に見直しが始まっていると思います。そういう中で先生は、あえて非軍事的な役割を目指さなくちゃいかんという理由がはっきりしない。

神谷　ちょっと言葉が足らなかったと思います。非軍事的役割を主にするということであって、軍事的な側面をしないということとはちょっと違う。ただ、大国というのは当然、軍事的役割が非常に大きい。そういうのがこれまでの国際常識であるところ、その部分については自主的に上限を設けているような、国力からするともっとできなくも

ないけれど、そこにある主の限界を設定している大国というものがあり得ないか。そういうことを日本が勝手に言っているのだとすればまさに独り善がりですけれども、日本が軍事面では普通にならないことがいろいろな意味で、日本にとってもその他の国にとってもためになるのだというふうに、日本だけでなく他国からもポジティブに考えられるとすれば、軍事的にアメリカ並み、イギリス並みにやらなくてもいいということになるのであって、何もしないというつもりはございません。

例えば、ノルウェーでも ーとあるところに最近書いて、まだ活字にはなってないんですが— パワー外交はできないと言いながらも、できるときには仰せの通りやるんです。もちろん爆撃は自分でしに行くということはできませんけれど、賛成することはするとか、あるいはそれこそ予防展開とか PKO というときには人を出すとか、危ないところにももちろん行くとか、そういう形で能力の範囲内でやる。

大国の場合には、純粋に能力的に言えば相当できてしまう、普通にやれば。しかし、それを日本の場合、日本人の多くがどうも希望しているらしいように、そこに限界を設定して、それがなおかつ独り善がりでないということがあり得るかどうか。そのことを考えたときに、無理にこじつけたのではなくて、理屈で考えていくと、どうも日本が我慢するということがよいようだ。そのことが、実は先にあります。そこから考えていくと、それをちゃんと確立したときには、どうも日本人の希望を同時にかなえられるのではないかと思った。ただしそれは、非軍事に特化するというのではございません。軍事的には、ミドル・パワー並みの役割は果たすけれど、それ以上のことは求められなくて済むような軍事力しか持たないような国とでも言いますか、それでやっていくというのはどうかという話でございます。ですから、持てる軍事力相応のことは必要とあらばする覚悟は必要だろうと思います。

F　現役の海上自衛官です。先生の今までのいろいろな議論の中で、軍事中級大国に対してのいろいろ議論が出ています。私も、ここにかかわっております。特に、大国という言葉に対してかかわっています。先生が言ってらっしゃるような、尊敬できる国という意味での大国はよく理解できます。先程、先生もちょっとお話しされましたように、大国の定義というか概念、そういうものを恐らく、自分が周囲の情勢を自分の思うがままにできるような国が大国だと思うわけです。そういうふうに考えたときに、本当に日本が大国にできるだけの国力があるんだろうかという点が一つ疑問があります。

また、そういう意味での大国を目指すということが、我が国を取り巻く周辺諸国等の中でどういう影響を与えるのかなということもございます。

最後に、もう一つ。先生は、国家の理念としての軍事中級大国という話をされました。その国家の理念を追及していく一つの手段として軍事力を持っているけれどもそれを使わないで、大国ではあるけれども「普通の大国」ではないということを一つの手段として考えられておられたようです。

そういう大国というものを尊敬できる国と考えた場合には、そういうものは国際的な貢献を何らかの形でやってその後から付いてくる評価であって、その評価を先に、そういうもので求めていくというのは納得できないような気がします。いかがでしょうか。

神谷　うまく答えられるかどうかわかりませんが、日本が大国になるとかならないという話です。私は、大国もいろいろな意味がありますけれど、行動すること、あるいは行動しないことも同じです。する、しないは別にして、ある種の行動に関する選択が、周り、あるいは世界にいやでも応でも影響を与えてしまうような存在は大国と言うべきものではないかと思っております。漠然とした言い方になりますが。そういう意味では、日本はずっと前から能力的には大国だった。ただ振る舞いが大国的ではなかった。それは、かなりの程度、自分でそうしてきたところがあるのではないかと思います。

自らの思うように秩序をいじれる能力が獲得できるかどうか、特に軍事力なしでという話ですが、そこのところこそ、まさにある意味では、日本にとっての課題になっていくのではないかと思います。日本は、何かすること、あるいはしないことが影響を与える存在になっていて、そしてその力を活用していくべきだということになっている。さっきも申しましたように、もう8年ぐらい、もたもたしていて余力がなくなっていくと、こういう話は一切必要なくなるかもしれません。しかし今のところ、まだ日本は大国だと言われる。

能力を活用するに当たって、せっかく活用する以上はなるべく自分の意思で秩序に働き掛けるということも、多分できたほうがいいと思います。しかし、従来の常識ではそういうことをするためには軍事的にも大国でなければ無理だということになっていた。そこに別な道はあるだろうかという話だと思います。日本人はいろんな言い方でそれ以外の道を模索してきましたが、概して国際的な納得は得られていない。日本人が勝手に、自分のところはこうなりたい、と言っているだけというものだったと思います。

しかし私の考え方は、まず東アジアの秩序を今後どうするか、その中で特に重要な日米中関係をどうするかということをまず考えたときに、どうも日本が「普通の大国」になることは好ましいことではない。しかし、日本が自立しないこと、あるいは米中にいつまでたっても対等の扱いを受けないこともどうも好ましいことではない。特にこの場合は日本にとって。そうだとすると、普通でない大国になるということがあり得るかどうかを考えてみる必要があるというので、軍事的にはミドル・パワーのまま我慢するということに積極的価値を見出したい。軍事的にメジャー・パワーになる道もあるんだけれど、それを我慢しているということを米中はじめとする諸国にアプリシエートさせられないか。

もし、それをアプリシエートされるとすると、日本は米中と対等になるのみならず、日本はそういう大国なんだということが認められるわけですから、そういう大国としての、「普通の大国」とは違う貢献の方式が出てくるだろう。それは、おのずから軍事力については、もともとミドル・パワー並みのものしか持ってないんですから貢献度がその程度でよくて、しかしその分、大国としての責任は別なところで補うというものになるんだろうと、後からその部分がきているつもりではあります。

それがよその国にどう受け取られるかという話です。私の理解する限りでは、中国及び韓国、それから北朝鮮について ―北朝鮮をこういう場合に持ち出してはあまり建設的ではないですけれども― その三つを顕著な例外としますと、軍事的にミドル・パワーで日米同盟基軸路線を選ぶ日本が、大国的に役割を果たすということについては、リザベーション(reservation)は付きますけれども、ある種待望する声もある。特にヨーロッパなどアジアを一歩外に出ると、待望論は非常に強まる。それから、日本から遠いアジアに行くとやっぱり待望論がどちらかと言うと強まるという印象を持っております。

ですからこれも具体的に何をやるか次第であって、この辺は漠然としたことを言っていてもしょうがないので、多分、日本が私がこういうことをやりますと言ってみせたときの反応がどうなのかを見るしかなくて、そこで、下手をやらないように気を付けるのは、政治指導者、外務省や防衛庁をはじめとする官庁、あるいは、私ども、勝手なことを外野から言う者、あるいは報道する方々等の責務であると思うわけです。いずれにしても法律は抽象論なので、中身についてはもちろんいろいろ工夫をしないといけないと思います。その部分については、湾岸戦争以降、さまざま出されているアイデアから、

いろんなものを参考にして引いてくることはできると思います。

ただ、今までは、繰り返しますが、日本は大国だけれど、伝統的な大国の路線は行きたくない、そういう願望は確かに、非常によく読み取れたんですけれども、それを国際的に受け入れられる形で、日本がそうなるべき必然性、あるいは正当性を提示した議論が、少ないように思います。そういう道を一つ言おうとしているつもりですが、もうちょっと頑張ります。

D　東アジアの話をされたので、そのことで質問させていただきます。最初のところ、北朝鮮との付き合い方で、日本と北朝鮮との関係で、北朝鮮のほうが得るものが多いわけだから日本のスタンスだというふうにおっしゃいました。それは、バリで見ればそうですけれども、今、日米韓の協調体制というところで、どうも韓米の方はなだめてなだめてという方式で行く。なぜ、なだめるかと言うとお金だと。そうすると、日本を使えというところがあって、日米韓の協調と、日朝の二国間関係がかなりズレが生じつつあると感じるのが1点。

それから、まさに日本の役割について朝鮮半島、中国が難しい。それを越えるところに行けばということですが、まさに中国があって、外務省の中国派の中に私の友人がいて、いつも揶揄するんです。彼が言うには、中国の戦略ははっきりしている。日本の影響力の拡大をいかに抑えるかに徹底している。そうすると、そういうことに対抗するために、先生のおっしゃっている話で通じるのか。もう少し、目には目を歯には歯を的なところも必要ではないかという見方もあると思います。日本がこういういき方をするには、場所が悪かった、ヨーロッパで語らなければという気はしますがいかがでしょう。

神谷　北朝鮮を巡って日米韓に思惑のズレがあるというのはまさにその通りです。例えば去年、テポドンが発射されで2週間目ぐらいでしょうか。ガルーチ大使が日本に来て、たまたまある会合で、昼飯を食べながら討論した。そのときに驚きましたのは、私はアメリカはやっぱり核が大事だと思っているでしょうと申し上げた。当時、地下施設の話がアメリカでは随分話題になっていたんですが、日本では、まだほとんど報道もなかったんです。アメリカ地下施設のことが第一のようだけど、日本では地下施設なんて新聞にもほとんど出ていなくて何と言ってもテポドンですよと言ったら、ガルーチ大使と大使館の公使がかなり本格的に驚いていた。へえ、そうなのかという反応を示して、わざわざ後で私としゃべりに来てくれたので今度はこっちがびっくりして、そんなこと

に気が付いてないのかと思った。それぐらい多分、根本的にいろんな認識がズレているんだと思います。そして、枠組み合意以来、日本だけではどうしようもない問題がいろいろ出ていますから、確かに日本が原則を自分だけで貫くのは大変です。

実は私がフォーサイトなどに書いたものの中では明示的に述べてありますけれども、北朝鮮が協力的な態度を取らないときは、日本は協力をやめてほっとけ、というのが私の意見ですが、その際に多国間で合意したものについては対象外にする。多国間で合意した分は別にして、日本独自では北朝鮮に何もしてやらない、ということで行くしかないのではないかと思います。

ただし、最近、韓国もどうも太陽政策とは言っていますけれども、「フォーサイト」の記事が出たころとはだいぶ様変わりして、相互主義という言葉が出てきています。相互主義ということなんです、TIT FOR TAT とか「目には目を」、私が申しているのは。ですから、韓国でも太陽政策よりは相互主義のほうがというような流れになってきているのでないかと、内心は心強く思っていなくもないんです。

ただ、アメリカがあって、これは実は地理的に遠くにございますので、日本とおのずから考えが変わってくるわけです。話が突然飛ぶようですけれども、アメリカにとってはこれは遠い地域の問題で、日本にとっては隣の話。日米安保の話には、全般にそのギャップは常にあるということを忘れてはいけないと思います。北朝鮮問題では、それが特に微妙に深刻だと思います。どうすればいいかについてはむしろD先生に教えを賜わりたいぐらいのところです。

政策調整に妙案はあるのかというのは、私もよくわかりません。ただ、アメリカについて言えば、原則を明確に出してくる国についてはある程度それは尊重するというか、尊重はしなくても敬意は払うところがありますから、やはり日本がぐにゃぐにゃと何だか場当たり的にやっているよりは、我が国は基本的にはこれでいきたい。ただし、もちろん一人で我を張ることを常にはしないけどこれが基本的態度だ、ということをはっきりと打ち出すことにはそれなりの意味が出てくるのではないかと思っています。

それから中国は、例えば六者協議というものを金大中大統領も小淵総理も提唱しているわけですが、それに非常に強く反対している。もちろん、一つの大きい理由は日本の政治的影響力の拡大を望まないということです。それから、昨年のインド・パキスタンの核実験の後の会合でも、日本やドイツも加えてという案をけ飛ばしたのも、P5 の特

権的な会合はそのままで保ちたかったからだと言われています。

そういう態度を取られるのはまことに不愉快なことであります。中国がそういう態度を取り続けていられる一つの原因は、日本に軍事力がないからだということに多分なるんだと思います。だから、軍事力を持てと言ってしまえば簡単です。しかし、いやそれは持とうと思えば持てるんですけれど、うちは持ちたくない。でも、あまりひどいことを言われると、持たなきゃいけなくなるかもしれませんねと言ってみせるのがいいかという話で、そういうソフトな脅迫は外交技術が伴えば可能だと思いますけれど、外交官の方にお聞きしたいところです。今の話で、日本の中国派というんですか、あれにはいささか、私もいらいらするところもありまして。

D　彼は、変えたいんだと言ってます。

神谷　そうですか。中国派の人が本当はそういうふうに言ってくれなきゃ困るのではないか。日本として、何も中国と敵対したいわけではない。できれば仲よくしたい。それから、中国が望まない（日本の）軍事大国化は、日本もどうもあまり好ましくないことだとは思っていないということ。しかしそれが故に、いつまでも見下されるようなことが続くと、ちょっと持ちませんよと言っていく。それですぐに問題が解決するほど、世の中甘いと私は思っていませんが、でも、その辺が一つの糸口にはなるのではないかと思います。こういう話をすると、私にそれほど経験があるわけではないですけれど、国際会議の席で中国の人は答えません。何だかちょっと困ったような顔をしているという経験がございます。

D　言葉をはさんで申し訳ないですが、中国のほうは、欧米と同じで、大国になれば、当然、軍事にいって大国になるというイメージがあるから、日本はなるだろう。それを抑えて、一生懸命圧力を掛けようとしているわけだけど、こちらがそんな気はないのに、そういうふうに言われると、やはり持たないといけないかと逆効果ですと言ってるんです。

神谷　日米同盟についても、強化しないでくれと言う。こっちも軍事大国になる気はないけど、その前提は、やっぱり今のところは日米同盟の維持・強化ということなんでしょうか。他に道があるなら教えてくださいという話です。その日米同盟がいけない。しかも、軍事力も大国になるなと言われてもそれは話が無茶じゃないですかということを私も申しております。

G　私も全然、軍事面は門外漢で突拍子もないことを言うかもしれません。アジア経済が専門です。先程、北朝鮮の問題を聞かれて、日本は放っていたほうがいいのではないかという話をされました。先日、韓国の人と話したときに「北朝鮮ビッグバンって知っているか」と聞かれて何かと言ったら、「今、北朝鮮の軍隊が北朝鮮の難民が流れ込んでいるのを阻止している。ところが、軍隊の人間も飢えてくるとこれはわからないぞ、軍隊が先頭に立って、どどっと韓国へ流れ込んでくる、飢え死によりはいいという格好で流れ込んでくる。逆にそっちのほうが心配だ、これが北朝鮮のビッグバンだ」という話をしていまして、なるほど、そんな心配をしているのかという気がしたんです。

本当に飢えてくると何をするかわからない。そうなってくると、日本も巻き込まれるという可能性も決してない話ではないだろう。必ずしも北朝鮮だけではなくて、今や、世界中どこに行ったって日本の工場があり、日本人はいるんです。そういったところ、日本の国内だけではなくて、外の日本人も含めて日本がそれを守るという力を、今本当に持っているのかというのがすごく心配です。

どうも議論を聞いていると、日本の軍隊は一応軍隊らしいものはあるんだけれども軍隊ではないですね。自衛隊はあるんだけれどもあまり戦わないんだという、あれしかないのではないかという気がしてくると、これは十数年前に聞いた話で、日本の自衛隊は、3 日間、持ちこたえればアメリカ軍が助けに来るのを待ってるんだ。これが基本戦略だというのを聞いたことがあって、まだ、そういうあれが生きてるのかな。どうも今の日米同盟は、そういうベースで見てみると、まだそんな雰囲気が残っているんです。

ところが、本当にアメリカ軍が、日本に攻めてきた軍隊に対して、血を流して戦うか。軍艦を派遣するとか、ミサイルで攻撃するとか、人が死ぬ可能性がないやつは、恐らく守ってくれるだろうと思います。白兵戦になって、アメリカ人が血を流さなければいけないときになって、本当に日本のために血を流してくれるかということになると、恐らく流してはくれないだろう。そうすると、日本は、本当にそうなると自衛権も放棄しているのではないかなという気がして、すごく心配です。それが第一点。

もう一つ。これまで、日本を非軍事の大国だ、大国だと言っている。確かに、これまで経済力でいけば日本は大国だったんですけれども、先程の話で 5 年か 10 年したら違う。恐らくこの前の 10 年で東アジアにおける日本を見た場合と、今の日本を見た場合と、全然経済力のウエートは違うと思います。これが 10 年先になってくると、もっと

違ってしまいます。というのは、日本は必ずしも経済大国としていつまでも残っているわけでは、絶対ないと思います。

これまでは金はあるという意味で、日本と親しくしておかないとという感じだったんで、ある程度抑止力が効いていたというか、日本を応援してやろうというのはあったのかもしれません。恐らく、そういう状況もかなり変わってくるのではないか。これは経済的な面から見た心配です。

神谷　私も政治学を専門でやって、軍事問題は、実は本当の専門家ではないわけです。きょうご出席の防研の二人の方も政治学ですから。

D　僕は日本の防衛庁研究所です。

神谷　ソ連に対しては 3 日かどうかは知りませんが、ある程度持ちこたえてアメリカの援護を待つということだったと思います。

相手が北朝鮮となると、現実にはまずミサイルが飛んでこない限り、というのはミサイルとテロ行動以外は泳いでくるわけにいきませんので、日本に攻めてくるということはできないはずであります。飛行機については、少し持っているけど、燃料がなくて年間 30 時間ぐらいしか練習していないから、ぼろぼろだという話ですし、技のほうがだめらしいです。ミサイルについても、こういう言い方はかなり語弊がありますが、通常のミサイルだったらいくら落ちても、ひどい話だと嘆いて済むんです。大量破壊兵器、特に核兵器が積まれた弾頭が飛んでくるということが起こらない限りは、テロ行為以外は大したことは起こりようがないということです。ですから、自衛隊が北朝鮮に負けるということは、まあない。それから、仮に突然、どこかに土俵を作って自衛隊と北朝鮮軍で勝負をすれば、多分さすがにわが方が勝つのではないかという話を私は聞いているし、そう信じたいところであります。

ただし、問題はいろいろあります。能力的には、もちろん専守防衛と言っているわけですから、それこそいろいろ我慢をしているわけです。それこそ自主規制です。そのためにあったほうがよさそうなものがないということは起こっているわけです。例えば、昨今、テポドン発射以来、一部の政治家の方が思い出したように先制攻撃の話をします。これはずうっと前からの政府見解にもあった話で、今初めて出てきた話ではないです。

向こうが攻撃を仕掛けてくることがはっきりしたときには、こっちから叩いてよろしいという話。よろしいと言うのは結構ですが、そのための能力はどこまであるかと言う

と、正確なところは是非どなたか口に出して言える範囲で補足していただきたいところです。私の乏しい軍事知識によれば、全く能力がないということはない。ただし、リライアブルか、確実にやっつけることができるかと言われると、非常に軍事的には怪しい。だから、能力はあるけれどあやふやだ、そんなぐらいしかないのではないかと思います。

これは、専守防衛ということのある種必然的な帰結で、どうも日本の専守防衛とか、憲法 9 条とか、あるいは憲法全体が北朝鮮みたいな国を前提していないんです。ああいう国が出てくると、お手上げになっちゃう。何しろあれは、平和を愛好する諸国民の公正にどうこうしているのであって、ああいうとんでもないやつが現れると、これはかなり大まじめな話、専守防衛はつらいなというところはどうしても出てくるように思います。

D　これまでは、確かに東西冷戦の中で、そう小さいのはなかったんだけれども、地域紛争の時代だと言われてますから逆に出てくるとしたら、ああいうやつのほうが可能性としては、固まっている。

神谷　ただ日本は、海に囲まれてますのであまりそういうのが直接来ないんですね。

F　今、先生がおっしゃったのは、大体その通りであります。北朝鮮に対しての対抗力は、おっしゃるようにミサイルが直接飛んでくるのをどう防ぐかということに対しては一部的に欠落をしているところがございます。あと、北朝鮮が攻めてこられるかというと、それだけの能力はありません。

それから、3 日しか戦えない分しかなくて、あとは米軍に期待をするということでした。考え方としては、1997 年に新しい防衛大綱を作りましたので、それより前の大綱の考え方はいわゆる小規模限定、独力対処という一つの考え方を持ってました。小規模のものについては日本が持ちこたえる。それを越えるものについては米軍の来援を待って反撃をするという一つの考え方の元に防衛力を整備してきました。

ところが冷戦が終わりまして新しく防衛計画の大綱を作ったときに、そういう考えはなくしまして、最初の段階から米軍と行動を共にするんだということで、それを具現化するためには従来ガイドラインがあったんですが、ガイドラインを変えなければいけない。そこで日米防衛協力の指針が新たに作成されました。現在、そういう考え方の下にいろいろな計画を作っているところです。

神谷　どうもありがとうございました。非常にわかりやすくなってよかったと思いま

す。やっぱり私の方に具体的に知識がないものですから、ついもやもやとなってしまうところを明確に言っていただくと非常にありがたいです。専守防衛は本当に北朝鮮みたいな国に対してつらいんです。私は、専守防衛というのは変な言い方であって、できたらその基本精神は残して言葉は改めたほうがいいようにも思う。その場合には、非挑発的防衛という言葉が北欧なんかで生まれて、今、世界的に受け入れられていて、オーストラリア人のアンドルー・マックという今は国連事務総長の特別補佐官か何かで安全保障問題をやっている人が、日本の専守防衛は非挑発的防衛をアジア・太平洋国家の中で唯一具体化しつつあるものだと褒めている。ちょっと褒め過ぎかもしれませんが。基本的には同じ精神だと思います。

ただ、非挑発的防衛と言うときには、専守防衛ではないんです。相手がとんでもないやつである場合には、それなりに対処する余地がある。原則としては専守防衛と同じでしょうが、例外的な国に対してはそれなりに対処する余地を残す。もしかしたら、そういうことが必要なのかなという気も個人的にはちょっとしなくはありません。

それから、アメリカが血を流してくれるかという問題は、実はこれからかなりまじめに出てくる可能性のある話だと思っています。これは、あまり単純に受け取られると日米同盟はないほうがいいとか、意味がないという話のように聞こえてしまうかもしれません。そうでないことを最初に申し上げた上で言っておきます。例えば、冷戦期の西ヨーロッパは、アメリカと同盟関係があってアメリカの核の傘の下にあった。しかし、アムステルダムのために、一体、アメリカはロサンゼルスか何だったかを犠牲にしてくれるかという議論がすでにあって、一体、本当にアメリカは、いざと言うときに犠牲を覚悟でやってくれるだろうかという心配があった。

ところが、日本の場合は、日本だけが単独で侵略されるということは冷戦時にはあまり現実性がなかったために、そういうことをまじめに考える必要は多分なかったんだと思います。北朝鮮の話が出てきて初めて、レベルは随分低いですが、だから冷戦期のソ連の話と同程度に考えるとむちゃくちゃな過大評価になります。しかし、レベルは低いけれど、初めて例えば日本が単独で核攻撃を受けるとか、あるいは日本が核と言わないけど武力攻撃を受ける可能性が、ある程度現実的な可能性として出てきて、そこで拡大抑止のクレディビリティみたいな問題の出る可能性が出てきている。

そこへ、昨今アメリカは戦争をしても一兵たりとも失いたくないという考えを非常に

強く出しているということがどう影響してくるか、在韓米軍が一体人質になってしまうのか、そういう難しい問題が、むにゃむにゃむにゃとあるように思います。実は、そういうことがあるから私は、自分の国の、狭い意味でのディフェンスということに関しても、日本は軍事大国にはならないけれど、もう少し自立ということを考えざるを得なくなっていくのではないかという予感めいたものはあります。

これについては、北朝鮮問題は何しろいつ終わるかわからない話で、そういう問題が深刻化する前にある程度いい方向にいってしまえば、案外、そういうことは考えずに済むかもしれない。これがぐじゃぐじゃっと延びていくと、もしかすると、そういう話にもなっていく可能性はあるなという気はしています。

それから、2 番目の質問は忘れてしまいましたけれども、非軍事でなおかつ大国ということがもし可能だとするとそのときには、さっきちらっと出しましたコ・オプティブ・パワーというようなものを何とかして高めていく工夫が多分、重要になっていくだろうということを申し上げて、あまり答えになっておりませんが、こっちはご勘弁願いたいと思います。

H　非常に貴重なお話、ありがとうございました。常々、感じるんですけども、日本の外交というか、私は石川県の出身なので、どのチャンネルでも必ず北京放送が何度も出てくる。そういうところで、嫌悪感を感じて育ったんです。別に自民党が好きとかいうんじゃないんです。とてもいやなものです。異様なものを感じて育ちました。それから、行方不明者が出ているという現実があります、北陸においては。

そういったものが日常の中にもあるにもかかわらず、日本で取り上げなかったという経緯を持っていて、先だってアメリカ大使館のご紹介によりまして、ボストン大学のロベルト・ロス教授とお話ししましたときに、「あなたのおかげで私たちは安全を得ました。ただ、去勢されてしまって、自立を、今、戸惑っております。21 世紀は、何とか自立したいものです」とジョークを言いましたら、与えられたものは失うのは当然のことでしょう。これが世界のルールだとおっしゃいました。

そういうことを考えるべき立場の方は考えてらっしゃるし、外交に対しても、説明の必要性があるというお話は今、伺いました。一番大事な説明の必要性は、国民側にもあるのではないかと思います。国民が理解していないと、例えば、今、おっしゃったような専守防衛をした場合でも、国民が自分たちの命を守ってくれるためにやったことに対

して、どういうアレルギーを起こして、そこに、そら見たことかという海外からの突き上げの材料になっていては、意味がないと思います。

ですから、そういう戦略の中には、国民側がやはりちゃんと機能するような体制も必要ではないかなと、全ての国策に対していつも思います。最も必要な説明は、まず内側からというふうに痛感しているんです。それに日本の国民は、救助があればずっと平和でいられるようなというのがいまだそういう会話が、いろいろなところでされていますし、政治家の方々もそこは避けてお話をなさる機会が多過ぎるのではないかと思っております。

神谷　多分、ご発言を本当に正確に理解したかどうか、ちょっとわからない部分もありますが、恐らく、お考えと私が思っていることは同じだと思います。国民に説明ということを今日の話の中では申しませんでした。けれど、自らの進路を自らが決めると言っているときに、何も一部のエリートだけがそうするというのではなくて、私のイメージとしては、国民というのもかなり抽象的な言い方ですが、ともかく精神としては、国民が決める。

ですから、例えば、今、日米同盟基軸路線で行くというのはさしたる反対もなく、冷戦後について承認されて、ガイドライン関連法案も通っています。でも、わけが本当にわかって、積極的に支持している人が何人いるかと言うと、甚だ心もとない。だから、支持は幅広いけれど、非常に薄いと私は外国の人にはどう思うかと言われると、言うことにしてます。これは、非常に困ったことです。

なぜ、そうなってるかというと、日米同盟基軸は、自分で選んだという気がまるでしていないからではないかと思います。ですから例えば、その路線を決めるに当たって、少なくとも形だけでも幾つかのオプションが示されて、それについてそれぞれの利害・得失が説明されて、まあどうやらこの道が一番いいらしいというふうに、漠然とでもいいから皆が思ったということがあれば、どれほどよかったかと思うわけです。

その際には、まだタブーかもしれませんが、軍事的にも自立するとどうなるという話もしてみせる。一方で、逆の側の極論は、多分、多国間協調に全てを賭けるというやつだと思います。これを選ぶとどうなりそうかということも言ってみる。非常に雑ぱくに言うと、日米同盟基軸と併せて三つです。もしかしたら、中間形態もあるかもしれません。三つないし四つ、五つぐらいのものを出して、その中で、やっぱりどう考えてもこ

れ（日米同盟基軸）が一番だと思いますけど、いかがでしょうというようなことがあってしかるべきだったし、いろんな意味で、実は、冷戦が終わって、ソ連が退場したときはそのチャンスであったはずですが、それがなかった。

軍事中級大国なんて言葉は使っていませんけれども、日本は軍事的には大国というか、自立を目指さないという決定は、実は、北新防衛大綱と日米安保の再定義で、日本は、実は明示的にいつの間にかやっちゃったわけです。これは、非常に困ったことかもしれないなと。そういうふうな道を選んだのだという意識は、防衛庁、外務省の一部の人にあることは承知しておりますけれども、政治家レベルだと一体、何人にあるのか。非常に心もとないことばかりだと思います。

司会　どうもありがとうございました。ご出席の皆様の活発な議論を伺わせていただきましたので、非常に内容の濃い討論になりまして、どうもありがとうございました。

また、ご案内を差し上げますので、よろしくお願いいたします。

本当に、本日は長時間、どうもありがとうございました。

[文責事務局]

第２部　巻末資料

東京財団第９回研究セミナー　　１９９９年7月9日

日本の外交・安全保障戦略を考える

防衛大学校助教授　神谷万丈

１．日本が直面している外交・安全保障上の課題

・北朝鮮問題
・日露関係
　→これらは重要ではあっても日本にとっての根本的課題ではない
　　より重要なのは―
・日米関係
・日米中関係
・アジア太平洋で、そして世界でいかにして敬意を払われる国になり、"co-optive power"を高めていくかということ
　→いずれも鍵となるのは、日本が自立性を回復すること

２．日本の外交・安全保障政策―何が問題か

・自立した日本が自らの進路は自らが決めるのだという気概がない
・日本人が日本をどのような国にしたいのかという明確なイメージを持っていない
・健全なナショナリズムや国益意識の欠如
　→おそらくはそうしたことの結果―
・目的意識の欠如
　→手段論ばかりで目標論がない

・自立していない日本の姿に対するいらだちはある

・日本にとって幸運であるように見えて実は不運なのは、自立した日本が自らの進路をあらためて決定したとしても、最も合理的な選択の結果は、実は現在日本が採用しているものと基本的には同じになるということ＝日米同盟基軸路線

３．なぜ自立心や目的意識がなくなってしまったのか

・戦後日本の国家戦略の特異な性格
・日米安保体制の成功
・戦後日本におけるナショナリズムの抑圧
・戦後日本人の国際的パワー・ポリティクスからの逃避
　→目標としての平和国家（憲法９条の神聖不可侵化）と国際協調
　→しかし、平和も国際協調も、それ自体は無内容

・手段における「平和国家」と目的における「平和国家」

・手段であるはずの国際協調が自己目的化

・３０年前にはあった自立への欲求がいつ、いかにして消滅してしまったのか

３．日本の自立への道とは
・軍事的自立による「普通の大国」への道
・そのような道があることを認識しつつあえて日米同盟基軸の軍事中級国家路線を貫く

・日本には軍事面を含めた自立の選択肢もあるのだが、自国の国益のためにも国際秩序の安定のためにもあえてそれをせず、「普通でない大国」として日米同盟基軸路線を歩み続ける。そのような道を日本人が自らの手で選択する。そして他国が、日本のその選択が自らにとっても利益になることを認める。そうしてはじめて、日本が軍事中級国家でありながら大国としての地位を得ることが可能になる。また、日本の国際貢献が非軍事面を中心としたものであるべきだということが、独り善がりとしてではなく主張できることにもなる。

・日本特別論、嫌米論、かつての非武装中立論
　→全て自立への欲求／ナショナリズムの歪んだ形での発露

・日本が目指すべきは、親米自主を基軸にした、「軍事中級大国」としての外交・安全保障路線
・そのためには、優れた政治的リーダーシップと優れた外交の技術が必要

４．ナショナリズムの問題
・日本にとっての「譲れない一線」とは何か
・かけがえのない日本独自の価値体系
・中庸を得た健全なナショナリズムを涵養する必要

東京財団 研究事業部
〒105-0003　東京都港区西新橋１－２－９ 日比谷セントラルビル 10F
【Tel】０３－３５０２－９４３８ 【Fax】０３－３５０２－９４３９
【URL】http://www.tkfd.or.jp